２０２５年度

入学試験問題

国　語

２月１日　午後

受験番号	氏　　名

中村中学校

問題は次のページからです。

一　次の(1)～(10)の――線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

(1)　幼い子どもの心はジュンシンだ。

(2)　キボの大きいイベント。

(3)　布をハサミでサイダンする。

(4)　発言にイギを唱える。

(5)　思わぬ事故でフショウする。

(6)　運動会がエンキになる。

(7)　カンレイに従って行動する。

(8)　実力の不足をオギナう。

(9)　ヒタイを集めて相談する。

(10)　勇気をフルって発言する。

二　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

（設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。）

＊字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

※フロイトは、①十九世紀のおわりごろ、この無意識の世界のゆがみが、人間のこころの病気を作りだすことを見つけだした。[1]、それが出発点になって、精神分析（ぶんせき）という、こころの底をしらべる研究が行なわれるようになった。[2]、フロイトは、その考えを発表したときから、そんなことはウソだとか、信じられないとか、たくさんの人から反対されたのだった。いまでさえ、まだフロイトの考えがわからない、信じられないという人もある。しかし、いま、君にしろ、ぼくにしろ、フロイトが発見して教えてくれた考えを、頭においていないものはない。自分では知らずに、彼（かれ）の考えを、ごくあたりまえのものとして使っている。[3]「気分を発散させる」なんて、ぼくたちは気軽にいう。しかし、そんな考え方は、フロイトの前にはなかった。欲求不満だなんて、だれでもロにする。やりたいことがあってもやれないことがある。自分で、やってはいけないと、おさえているのだ。すると、こころに、なにかもやもやした気分がたまるような気がする。そんなときに「ぼくは欲求不満を感じてる」なんていうだろう。そんなことは、だれだっていうし、じっさいにそうだと思っている。そしてそれが、フロイトが無意識の発見をしなかったら、使われていないはずのことばだと、考えることができるだろうか。

　つまり、フロイトの考えは、いつのまにか正しいものとして、だれにも受けいれられてしまっている。しかも、そんなことは、フロイトがいいだすよりも前から、人間が知っていたことのように思われている。ところが、フロイトが、無意識の世界にあるいろいろなことを発見して発表したとき、当時の人は、そんなことはフロイトの、

ちょっとばかりおかしな頭の中にある夢みたいなものだといって、相手にしようともしなかった。いまから考えると、びっくりするくらいだ。②

しかし、それも当然だった。なぜ、はっきりした真実が、人のこころにかたくなに受けいれられないか、それをフロイトの考えが、ぼくたちに説明してくれる。

人間は、地球が平たいものだと思っていた。そして、太陽や星が、空をまわっているのだと考えていた。しかし、※コペルニクスという人が、五百年ほど前に地球が動くのだといいはじめた。※マゼランは地球を一周して、地球がまるいということを、たしかめて見せた。でも、③そのことが人間に理解されるまでには、とても大きな反対があったのだ。では、どうして、そんなにはっきりしたことが、受けいれられなかったのだろう。君は、小さいとき、地球はまるいのだとおとなにいわれたとき、こんなふうに考えたことはないだろうか。

「地球はまるいの。それなら、反対がわにいる人は、どうして落っこちてしまわないの」

「地球がまるくて、反対がわにも人がいるなら、その人たちは、さか立ちしているのかしら」

ぼくも、小さいころ、そんな心配をした。だから、昔の人だって、地球がまるくて、ぐるぐるまわっているなどといわれたら、おそらく、おなじような心配をしたにちがいない。その心配が、地球はまるいと思わせないように邪魔（じゃま）していたのだ。

もし、地球がまるいと考えたうえで、それでも下がわの人間が落ちたりしないのが事実なのだから、なぜ落ちないか理由があるはずだと考えれば、※ニュートンより前に、重力の発見をすることができただろう。しかし、ニュートンのように考えることができた人は、彼の前にはいなかった。そこから、いくらはっきりした真実であっても、自分が不安になるようなことは認めたくないとい

う気持を、人間が持っていることがわかる。その、ここ
ろの中に受けいれたくない気持を、[A]という。その、
こころの内がわにある[A]というものを見つけたの
も、フロイトだった。

フロイトは、無意識の持っている力を発見したばかり
でなく、自分の発見が、ほかの人びとになかなか受けい
れられないだろうということも発見したのだった。だか
ら、彼の考えの正しさが、多くの人たちに受けいれられ
るには長い時間がかかり、大きな反対に出会うだろうと
いうことを、自分でも知っていた。こんな発見をしたの
は、とても皮肉なことだ。④けれども、それだから、彼は
大きな反対に出会っても落胆（らくたん）しないですんだ。

では、なぜフロイトの発見は、そんなに抵抗（ていこう）されたの
か。もし、フロイトのいうように、ぼくたちのこころに
は、自分たちで知ることのできない、そして思うように
ならない無意識というものがあって、それに自分たちが
動かされていると考えたら、不安にならないだろうか。
きっと不安になるはずだ。だって、そのわけのわからな
い無意識というのに自分が動かされて、なにをやってし
まうかもわからないような気がしてくるからだ。なにか、
とんでもない悪いことをしてしまうかもしれない、恥（は）ず
かしいことをしでかすかもしれない、そう思ったら、落
ち着いていられないだろう。しかし、それは、地球の下
に行ったら地球から落ちてしまうような心配と似ていな
いだろうか。そう、そっくりだろう。

ぼくたちの知らない無意識というものに、自分が動か
されているのはたしかだが、それでも、ぼくたちが、わ
けのわからないことを年じゅうしでかしているわけでな
いことも事実だ。それがどうしてだろうと考えれば、ニ
ュートンが引力を発見したように、きっと無意識の中に
ある構造を発見できたはずだ。

しかし、それはフロイトの前の人にはできなかったこ

となのである。フロイトより前の人でも、人間が無意識に動かされているかもしれないと思った人は何人もいた。しかし、そういうのを⑤どうしてもためらってしまったのだった。フロイトとは、そこがちがっていた。

（なだいなだ『心の底をのぞいたら』筑摩書房）

※フロイト……オーストリアの神経外科（げかい）医。精神分析学の創始者。

※コペルニクス……ポーランドの天文学者。

※マゼラン……ポルトガルの航海者。

※ニュートン……イギリスの数学者、物理学者、天文学者。ニュートン力学の創始者。

問一　――線①とありますが、「十九世紀」とは何年から何年までですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、一八〇〇～一八九九

イ、一八〇一～一九〇〇

ウ、一九〇〇～一九九九

エ、一九〇一～二〇〇〇

問二　[1]～[3]に当てはまる語句をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、ところが　　イ、つまり

ウ、たとえば　　エ、そして

問三　――線②とありますが、それは人間が何を持っているからですか。適当な箇所（かしょ）を本文中から四十二字で探し、最初と最後の五字を答えなさい。

問四　――線③について、次の問いに答えなさい。

(1)「そのこと」の内容を十八字でまとめている箇所を本文中から探し、「～こと。」に続く形でぬき出しなさい。

(2)「とても大きな反対があった」とありますが、それは人間が地球をどういうものだと考えていたからですか。十五字以内で答えなさい。

問五　二か所ある［A］に共通して入る言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、反対　イ、邪魔　ウ、抵抗　エ、落胆

問六　――線④とありますが、「皮肉」な状況（じょうきょう）の例として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、人の手助けをさせるために開発したＡＩに仕事を奪（うば）われる。

イ、おこづかいをためておしゃれな傘（かさ）をやっと買ったら、梅雨（つゆ）が明けてしまった。

ウ、バレンタインデーに手作りチョコを渡（わた）したら、その相手はチョコレートが嫌（きら）いだった。

エ、オーディションの予選を通過したが、ケガのため本選には出られなかった。

問七　――――線⑤とありますが、それはなぜですか。本文の言葉を使い、六十字以内で答えなさい。

問八　筆者によると、フロイトの発見によって、〰〰〰線「気分を発散させる」「ぼくは欲求不満を感じている」などという考え方が生まれましたが、あなたはどのようなときに「欲求不満」を感じますか。そして、それをどのように「発散」しますか。あなたの経験をふまえて書きなさい。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

（設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。）

＊字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

ぼく（土田野歩人（つちだのぶと））は代々農業を営む家に生まれた小学六年生、川村ちとせは四月にぼくのクラスに入ってきた転校生である。周りになかなか心を開こうとしなかったちとせだが、ひょんなことがきっかけでぼくと少しずつ打ち解けるようになった。さらに、野歩人の姉、明穂（あきほ）に勉強を見てもらったことから、たびたび野歩人の家をおとずれるようになる。ちとせは母親を病気で亡（な）くし、新聞配達の仕事をする父親と二人で暮らしているが、家の事情で転校をくり返していた。

八月の半ばには、地元の神社の祭りがある。

川村は、明穂といっしょに祭りへいく約束をして、夕方近くにうちへきた。

かあさんと明穂は、川村を二階へ連れていき、しばらくおりてこなかった。

そのあと、下へきたときは、三人ともゆかたに着がえている。

「あれ。どうしたんだよ、それ。前に見たことあるな」

ぼくはいい、白地にアジサイのがらがついた、川村のゆかたをながめた。

a「よく似あってるだろ。ちとせちゃんが、着物を着たことないっていうからさ。おととしまで、明穂が着てたのを、だしてみたんだよ」

b「へえーっ。なんか、川村じゃないみたい」

c「こうして見ると、おねえちゃんと妹だね。ふたりとも、きれいでさ」

d「わたしも、こんな妹がほしかったよ。弟なんか、うる

さいだけだもの」

e「妹がいたら、きっと、ゴリラみたいなねえちゃんはいやだっていって、泣くよ」

f「そんなことないって。ソフトボールで、バッテリーも組めるしさ」

ぼくたちが、そばでさわいでいるあいだ、川村は、はずかしそうにだまっていた。

それから、いっしょに庭へ出ると、かあさんは明穂と川村の写真をとった。

川村は、自分で自分を見まわしながら、［　A　］ようだった。明穂とならんで、いろいろポーズをとって①いたが、そのうちに、突然（とつぜん）、うしろをむいてしまい、両方のてのひらで顔をおおって泣きだした。

おどろいたかあさんは、そばへいき、肩（かた）をだいてなぐさめた。

「どうしたの。また、おかあさんのことでも、思いだしちゃった？」

川村は首を横にふり、すぐには返事をしなかった。

心配した明穂も寄りそって、背中をさすりながら、のぞきこむ。

「だったら、なによ。うちのみんなは、ちとせちゃんの味方だよ。いやなことがあったら、なんでもいいからいってごらん」

「あたしもね……あたしも、できれば、こんな家に生まれたかった」

川村は、ひとこと、しぼりだすようにいうと、［　B　］ように、大つぶのなみだを流して泣いた。だきしめた明穂もなみだぐみ、そのまま、じっと立ちつくしている。

ぼくも、しんとしてしまい、なにをいっていいかわからなかった。

家の事情はよく知らないが、川村が、ずっとがまんして

きたのはわかる。おなじ小学生の女の子を、こんなふうに泣かせるものが憎(にく)く、形があるなら、めちゃくちゃにやっつけてしまいたかった。

盆(ぼん)おどりや、町内会が用意した夜店は、八時すぎに終わった。

いったん、ぼくの家にもどってから、川村はワンピースに着がえた。

かあさんは、ぬいだゆかたをたたむと、帯もいっしょに紙ぶくろへ入れて、川村にさしだした。

「これ。うちじゃ、もう着る人がいないからさ。ちとせちゃん、もらってくれる?」

「え、いいんですか!?」

②川村は、よほどうれしかったのか、遠慮(えんりょ)もわすれて、目をかがやかせた。

「いいんだよ。もらってくれたら、わたしもうれしいし」

明穂もいいそえ、夜店でもらった水ヨーヨーを手わたす。

かあさんにいわれ、ぼくと明穂は、アパートまで送っていこうとしたが、川村は、だいじょうぶだといってことわった。

表の道からは話し声がきこえ、神社から帰ってきた人たちが歩いている。紙ぶくろを、だいじそうにかかえた川村は、げんかんで見送るぼくたちに手をふり、ひとりで帰っていった。

祭りのあとは、町会役員の慰労会(いろうかい)があるので、とうさんはもどってこなかった。あせをかいたぼくたちは、順番に風呂(ふろ)へ入り、縁側(えんがわ)にすわってすずんだ。

「やれやれ、祭りも終わったねえ。今年は稲(いね)もよく育ってるし、田の神さまも、無事に送りだせそうだよ」

かあさんはいい、遠くの田んぼに［　C　］ように、夜空をながめた。

田の神さまは、稲の取りいれがすむまで村里にいて、冬のあいだは、山へ帰っていくのだという。山には川の源が

あり、田んぼへ水を送りだしてくれる。だれも神さまを見た者はいないが、無数の星が［★］夜空をふりあおぐと、ぼくも、どこかで見まもっていてくれるような気がした。

冷蔵庫からアイスクリームを取りだし、三人で食べていると、門柱代わりのケヤキの木をまわり、庭に男が入ってきた。

酔(よ)っているのか、足もとをふらつかせ、縁側へ近寄ってくる。

おどろいて、ぼくたちが見まもっていると、それは川村のおとうさんだった。うしろから、ついてくるのは川村で、さっきとおなじ服装をしていた。

「おや。どうしたの、ちとせちゃん。なにかわすれ物？」

声をかけたかあさんに、川村は、返事もしないでうつむいた。

おじさんは、ついさっき、川村にわたしたばかりの紙ぶくろを手に持ち、かあさんの前へつきだした。

「これは、なんだ。ええっ!?どういうつもりか知らねえが、うちの子には、ちゃんと、おれという親がついてるんだ。こんなものを、めぐんでもらういわれはねえ」

「ああ、そんなつもりはなかったんだけど……いけなかったですか」

「あたりめえだ！ここんとこ、下手に出てりゃいい気になりやがって。地元じゃ何様か知らねえが、見くだして、ひとをバカにするのもほどほどにしろっ」

「気にさわったらすみません。そうですよね。もらってもらう前に、ちゃんと、親ごさんにおことわりすればよかったですね」

③かあさんはあやまり、逆らわないで、ふくろを受け取った。

酒を飲むと、ぼくのとうさんは顔が赤くなるが、おじさんの場合は青白かった。

前に、うちへきたときとはちがい、目がつりあがっている。言葉づかいも乱暴なわりには、相変わらず、どこか気弱な感じがつきまとい、まっすぐにかあさんを見ようとはしない。

かあさんもそれを見て取り、おそれるようすはなかった。うしろに立っている川村に目をむけ、気づかうよゆうがある。

おじさんは、ズボンのポケットから、一万円札をわしづかみにして取りだした。

それを受け取れというように、ユラユラと、かあさんの前へさしだしていう。

「ゆかたのクリーニング代だ……これだけありゃ、文句はねえだろう。親切ごかしに連れだして、うちの子に、二度とよけいなことはしねえでくれ」

「わかりました。考えたらずなことをしてしまい、申しわけありません。きょうはもう、時間もおそいし、ちとせちゃんもこまってるみたいだしね。あした、あらためておわびにうかがいますから、どうぞ、このままお引き取りください」

「それは、どういうあいさつだ。おれの金は受け取れねえってか」

おじさんはしつこくせまり、持っていたお札を投げつけた。いきおいあまって足をもつれさせ、その場にくずれ落ちる。

「いいかげんにしてよ、おとうさん！酔ってなきゃ、なんにもいえないくせに、これ以上、はずかしいことをしないでよっ」

うしろから、大声でさけんだ川村は、おじさんの腕（うで）をつかんで立たせた。

よろけたところをおすようにして、表の道へ連れだそうとする。

ぼくは、ハラハラするだけで、こんなときでもなにもい

えなかった。川村のおこった顔は見なれているが、学校にいるときとはちがい、とても悲しそうだった。

「すみません……ほんとに、すみません」

④縁側をふりむき、頭をさげた川村は、なにかいいたそうにかあさんを見た。

それも［★］あいだのことで、もういちど、ペコッとおじぎをすると、かあさんが口を開く前に、おじさんをおして道へ出ていく。⑤いき場をなくした一万円札が、夜風にふかれて、ひらひらと庭でまいあがった。

その日の夜、ぼくは、なかなか、ねつくことができなかった。

子どものぼくには、どうしようもないのはわかっているが、なにかしてやりたい。

悲しそうな川村の顔が目に焼きつき、夢の中にまで出てきた。翌日の朝になると、川村はラジオ体操を休んだ。ぼくは、よびにいこうかと思ったが、みんなを放っておくわけにはいかない。心配を顔にはださず、いつものように体操を終わらせた。

「しょうがないなあ。川村も、休むんなら、連絡（れんらく）してくれりゃいいのに」

ひとりでハンコをおしながら、わざと文句を口にすると、※ふたごは見すかしたようにいう。

「知らないの？女子には、そういう日もあるんだよ。六年生なら常識でしょ」

「それとも、あれかな。あの子が休むとさびしいわけ？」

「バーカ、そんなんじゃないよ」

デコピン攻撃（こうげき）をしてごまかしたが、じっさい、ぼくは、ものたりなかった。かあさんや明穂のようなわけにはいかないが、クラスメイトだし、ラジオ体操の仲間として、できればぼくにも、なにか相談をしてほしかった。

⑥その日は、午前中にスイミングクラブへいき、むちゃくちゃに体を動かした。

クラブを出て、送りむかえのバスからおりたときは、正午をまわっていた。

元気なく歩いて家に帰り着くと、かあさんはいない。

代わりに、昼食のしたくをしていた明穂が、台所から出てきていった。

「たいへんだよ。ちとせちゃんのおとうさんが、バイクでころんでね。新聞配達のとちゅうで、病院へ運ばれたんだって」

「ほんと!?それって、いつのこと」

「ちとせちゃんから電話があったのは、十時ごろだったかな。おかあさんは病院へいったけど、あとでようすを知らせるから、わたしたちはこなくていいって」

「けがって、どこ?死んだりしないよね」

「それほどじゃないけど、片ほうの鎖骨(さこつ)を骨折したみたい。ゆうべは、だいぶ酔ってたから、あのまま配達にいったんじゃ、事故だって起こすよ」

「うん。そうだよな……」

ぼくはまた、川村の顔を思いうかべ、胸がうずいた。病院でどうしているかが気になって、かあさんの連絡を待ちながら、居ても立ってもいられなかった。

とうさんは遠くの田んぼへでかけていて、夕方までもどってこない。

自転車にまたがり、まもなく帰ってきたかあさんは、まず台所へいって、麦茶を飲んだ。

ぼくと明穂は待ちきれず、そばにつきまとってたずねた。

「どうだった?ちとせちゃんは、まだ、病院でつきそってるの」

「そうじゃないよ。お医者さんは、きょう一日だけでも入院して、ようすをみるようにいったんだけどさ。おとうさんはいやがって、無理やり帰っちゃったんだよ。ちとせちゃんもいっしょにね」

かあさんは、先に食事にしようといい、三人で、明穂が

つくったチャーハンを食べた。
そのあと、お茶を飲みながら、かあさんは、きいてきたことを教えてくれた。
川村のおとうさんは、数年前から、あちこちの新聞販売店をわたり歩き、配達の仕事を続けてきたらしい。
仕事ぶりはまじめで、ほかの配達員が急に休んだりすれば、自分から、代わりを引き受けた。集金にいっても、ていねいな口をきき、お客さんからの評判はいい。配達仲間にも気をつかい、たのまれれば、無理をしてでもお金を貸してやったりしていた。
もともと気が弱いところがあって、おこったり、いい返すことができない。
一方では、そういう自分がいやになり、ときどき酒を飲む。
酔うと、人が変わったようになり、相手かまわずいいたいことをいう。

それがもとで、けんかになり、一か所で仕事が長続きしない原因になっていた。ゆうべも祭りで酒を飲み、酔った勢いにまかせて、うちへきたらしい。
「販売店のご主人も、病院へきていて、いろいろ教えてくれたんだけどね。ちとせちゃんが生まれたころは、自動車の組み立て工場に勤めてたそうだよ。そのあとで、おかあさんが病気になったから、工場をやめた退職金で、入院費用をつくったんだって」
「だけど、死んじゃったんだよね」
「そうだよ。お葬式をすませてから、また、工場へもどりたかったんだけどね。不景気だし、若くもないから、仕事はみつからなかったみたい。苦労してきたんだよ」
かあさんは、気の毒そうにいい、あとは言葉をとぎらせた。
川村の身になって考えると、腹が立ち、ぼくはあまり同情できなかった。

「それはそうかもしれないけどさ。やっぱ、最低だよ。酔っぱらってあばれるような親じゃ、子どもはたまんないもの」

「そうかねえ。わたしはわかる気がするよ。根がまじめで、おひとよしだから、人一倍、ストレスをためこんじゃうんだろ。酔いがさめて正気になると、死ぬほど後悔するんだよ。ただ、めぐりあわせが悪いだけでさ」

「なんでだよ。うちのおとうさんも酒が好きだけど、あばれたりしないだろ」

「それはそうだけど、おとうさんも口べたで、人づきあいが苦手でしょ。なにかいやなことがあっても、だまって、がまんしちゃうじゃない。似てるとこあるよ」

「だけど、ちがうだろ。こまっても、自分でなんとかするしさ」

「それはね。おとうさんがこの町で生まれて、ここで育ってきたからだよ。家があり、田んぼがあり、周りには支えてくれる人がおおぜいいるし、農家の仕事は、口べたでもやっていけるだろ。そういうことって、すごくだいじでさ。人が安心して暮らしていけるかどうかの分かれめなんじゃないのかな」

ぼくは納得しなかったが、お茶を飲みほしたかあさんは、ポツッといいそえた。

「ちとせちゃんのおとうさんは、このところ、ずっと、お酒を飲まないでいたみたいだよ。久しぶりに飲んだのは、祭りがあったせいもあるけどさ。ちとせちゃんが、うちにばっかりきてたから、子どもを取られたような気がして、さびしかったのかもしれないね……ちとせちゃんは、自分のせいだっていって、泣いてた」

ぼくは、なにもいい返すことができず、くちびるをかみしめるだけだった。

（浅野　竜『シャンシャン、夏だより』講談社）

※ふたご……野歩人の近所に住む小学五年生のふたごの姉妹。彩子（あやこ）と奏子（かなこ）のこと。

問一　a～fの会話文のそれぞれの話し手について、その組み合わせとして正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、aかあさん　b明穂　cかあさん　d明穂　eかあさん　fぼく

イ、aかあさん　bぼく　cかあさん　d明穂　eぼく　f明穂

ウ、aかあさん　bぼく　cちとせ　d明穂　eぼく　f明穂

エ、aかあさん　bぼく　cかあさん　dちとせ　e明穂　fちとせ

問二　A ～ C に入る言葉を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア、思いをはせる

イ、心を痛めている

ウ、うっとりしている

エ、つかえていたものが取れた

問三　――線①とありますが、このときの気持ちを表している箇所（かしょ）を本文中から二十二字でさがし、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問四　――線②とありますが、「川村」のこの気持ちが行動として表れている部分を本文中から十六字でぬき出して答えなさい。

問五　二か所ある★に共通して入る言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、きらめく　　イ、かがやく

ウ、ときめく　　エ、またたく

問六　――線③とありますが、「かあさん」はちとせの父親になぜこのような態度をとったと考えられますか。次からふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、ちとせのおとうさんは酔うと何をするかわからないので、何か暴力をふるわれるのではないかと怖くなったから。

イ、ここでちとせのおとうさんと言い合いをすると、かえってちとせにつらい思いをさせてしまうと思ったから。

ウ、ちとせのおとうさんが腹を立てた気持ちにも理解できるところがあり、怒らせてしまったことを申しわけなく思ったから。

エ、激しい感情をぶつけてくるちとせのおとうさんに対して何か言い返しても、火に油を注ぐだけだと思ったから。

問七　――線④とありますが、「川村」は、「かあさん」にどんなことを言いたかったのだと考えられますか。本文を最後まで読んで答えなさい。

問八　――線⑤とありますが、これについて説明した次の文章の（　1　）、（　2　）に入る内容を指示された字数で答えなさい。ただし、（1）は本文中からぬき出して、（2）はふさわしい内容を自分で考えて答えること。

「おじさん」（川村のおとうさん）から、「（　1　※十二字）」と言って差し出されたものの、「かあさん」からすると、そのお金はもらう理由のないものなので、（　2　※十字以内）。しかし、おじさんが激しく怒り、お金を投げつけたため、一万円札は「いき場をなくした」状態になったということ。

問九　――線⑥「むちゃくちゃに体を動かした」について、このときの「ぼく」の気持ちとしてふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、酔っぱらって暴れた川村のおとうさんに対する腹立たしさ

イ、何かしてあげたいのに何もできない自分に対するくやしさ

ウ、同級生なのに自分を頼（たよ）ってくれない川村に対するさびしさ

エ、川村に対する思いを見透（みす）かされたことに対するはずかしさ

問十　次は、本文を最後まで読んだ清美さんと高校生のお姉さん、直子さんの会話です。（　A　）、（　B　）にはどのような内容が入ると思いますか。考えて書きなさい。

清美「ちとせちゃんのお父さんがあまりにひどくて、イライラするよ。野歩人のおかあさんは、なぜ、こんな人をかばうような言い方をするんだろう。」

直子「そうだね。わたしも最初はそう思った。でも、野歩人のおかあさんが最後に話した内容を読んではっとしたんだ。」

清美「どういうこと？」

直子「このお父さん、娘（むすめ）であるちとせちゃんが（　A　）のがさびしかったんじゃないかな。自分が父親としてきちんとしていないってせめられたような気持ちにもなったのかもしれないし。」

清美「なるほど、そういうことか。そう考えたらこのおかあさんの言葉の意味もちょっとわかるような気がしてきたよ。もしかしたら、これはわたしの想像だけれど、ちとせちゃんはあの日家に帰った後、（　B　）のかもしれないよね。」

直子「あー、そうか。もしそんなことがあったとすると、お父さんはさらにつらい気持ちになってしまったかもしれないね。」

清美「改めて考えたら、このおかあさん、いろんな人の心がよくわかってすごい人なんだなと思えてきたよ。」